

新刊紹介

上田広美・岡田知子編『カンボジアを知るための60章』

初鹿野直美



明石書店
2006年

本書は、「エリア・スタディーズ」シリーズのカンボジア編として、現代カンボジアの文化、暮らし、歴史、社会、芸術、経済、政治の各方面に精通した執筆陣によって、全六部六

〇章にまとめられたものである。初めてカンボジアに関心を持った人たちにむけた入門書である。編者は述べており、各章での記述がカンボジア研究の入り口を数多く示してくれているので、初学者にとって非常に理解しやすいものとなっている。しかし、近年エネルギーシフトに変容しつつあるカンボジアの姿に多様な側面からアプローチしている様子は、初めての人の限らず、関心をもって観察してきた人々にとっても、カンボジアの「今」を確認するうえで有用な書籍であろう。

内戦の深い傷跡、貧困にあえぐ人々の姿というのが、今なお一般的に流布しているカンボジアのイメージである。最近でこそ、アンコールワット遺跡観光への関心も高まっているが、「遺跡」の外に広がる世界を、「貧困」「戦争」以外のキーワードでまとめた書籍はなかなか見当たらない。編者は日本でのカンボジア理解にこのような偏りが存在することを指摘したうえで、それ以外の側面にも広く目を向けている。無論、カンボジアの現在の姿を描き出す際、これらのキーワードを抜きに語ることはできない。本書は、カンボジアという国やそこに生きる人々が、大きな社会・経済環境の変化のなかにあって、今どのように戦争や遺跡と向き合っているのかをあらゆる事象から捉え直そうとした一冊ともいえる。以下、本書の構成にしたがって、簡単に内容を紹介したい。

第一部の「ことばを読む」では、カンボジア語の文字・文法・発音などの基礎に始まり、民話や古典文学・伝説詩、小説にいたるまでが紹介されている。カンボジア人の生活に深く根ざした物語が多く紹介される。なお、言葉・文学は如実に歴史を反映するものであり、内戦を挟んでのカンボジア語の変化も指摘されている。

第二部の「暮らしを知る」では、主として伝統に規定された世界を描き、人々の衣食住や冠婚葬祭などの様子を紹介する。宗教は内戦中に一旦息を潜めざるを得なかったが、現在では再び人々の生活に深く根ざしている。農村部ではさまざまな民間信仰も盛んである。

第三部の「歴史をたどる」では、先史時代にはじまり王朝文化に彩られたアンコール王朝の時代から、フランス植民地時代を経て、独立、内戦の時代、そして現代に至る長い歴史を紹介している。カンボジアでは、現代史をどのように教育するかは大きな課題のひとつであり、人々が内戦の記憶と向き合おうとしているのかの苦悶が垣間見える。

第四部の「社会を考える」では、内戦からの復興のなかで、カンボジアがいかに平和と政治の安定を目指して動いてきたのかを描く一方で、負の遺産として社会が抱える問題を紹介する。一九九七年の政情不安後は、カンボジアは一定の政治的安定を確保しているが、ポル・ポト時代の

の虐殺をいかに裁くかが注視されるなど、今なお微妙な緊張感と対峙している。不発弾・地雷の問題が存在することや、エイズや人身取引等の問題が蔓延していることは、周知のとおりである。

第五部の「芸術を楽しむ」では、内戦で破壊され、担い手の多くが失われた芸術分野について、アンコールワットの保護への取り組みや、古典・伝統芸能の紹介にとどまらず、大衆芸能や映画や音楽にいたるまで、庶民が親しむあらゆるエンターテインメントを紹介している。歌や映画など、思わぬところでの日本とのつながりについても詳述されており、カンボジア文化を通して日本文化を見直すこともできるというのは、新鮮な視点であろう。

第六部の「明日へつなぐ」では、日本を含む国際社会とのグローバルなつながりのなかで経済発展を遂げる姿と、一方で農業や漁業の営みを繰り広げ、変わらぬメコン川からのめぐみのなかに生きる人々の姿を描き、「明日」のカンボジアを展望する契機としている。

本書の随所に織り込まれたコラムは、これら六〇の視点に加えて、お奨めの文学作品やさまざまな伝承・歴史的事象を紹介しており、カンボジアについて各分野に長く関わってきた執筆陣ならではの知識に基づいた執筆陣ならではの知識に基づいた視点で紹介されている。

(はつかの なおみ/アジア経済研究所新領域研究センター)